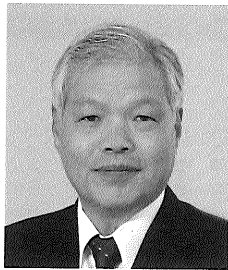


淑徳高女生の修学旅行

学園理事長 小林 素文



応し設立されたのが愛知淑徳です。

発足当初は『愛知淑徳女学校』でしたが、翌年（明治三九年）文部省から認可を受け、愛知県最初の私立の高等女学校である『愛知淑徳高等女学校』が誕生したのです。当時、国が求める高等女学校の教育目標は「良妻賢母の育成」であり、英語や理科は随意科目でしたが、その二科目を必須科目としたところに淑徳らしい進取の気性がありました。

そうした進取の気性は生徒にも受け継がれました。

明治四一年、翌年卒業を控えた愛知淑徳第一回生たち

は「卒業記念に京都への宿泊旅行がしたい」と申し出ます。しかし、当時、女性の行動には世間の目が厳しく、嫁入り前の女生徒に宿泊旅行を伴う学校行事を行う高等女学校は愛知県にはありません。しかも、父母の反対があったことから、申し出は受け入れられませんでした。そこで、淑徳高女生は、せめて校内で願いをかなえようと一工夫をしました。

明治四一年一月、学校内に京都の名所を作り、京都名物の模擬店を出し、演芸大会を催したのです。

こうした淑徳生の京都旅行への思いが伝わり、創立者小林清作校長が「宿泊旅行に間違いをおかす教育はしていない」と父母を説得し、明治四二年三月、記念すべき第一回卒業式の五日前、「卒業お礼参り」と称した伊勢神宮への一泊二日の修学旅行が実現したのです。

これは愛知県初の高等女学校の修学旅行です。

その後大正四年まで、卒業式の数日前、二見ヶ浦の『二

見館』または『賓日館』（現在、国の指定文化財）に泊まり、夜は演芸会を開き、翌日伊勢神宮にお参りをする修学旅行が恒例行事となりました。

*

戦前、高等女学校卒業後の進学先は女子師範学校か女子専門学校でしたが、そこへの進学率は戦前を通じて一％程度。高等女学校が実質的に女子の最後の学校生活でした。愛知淑徳でも、卒業後は、数年花嫁修業をし、結婚をし、良妻賢母たらんと努めていく者がほとんどであり、卒業を控えての友との宿泊旅行は、どれほど解放感に満ち満ちていたことでしょうか。

『思へば此度の旅行に我々は云い難き楽しみと、而も多くの経験を得たり。このうれしさ何に喩へむ』（『愛知淑徳六〇周年記念誌』より）

*

伊勢方面への一泊二日の修学旅行は、大正五年から東京・鎌倉・江の島への三泊四日となり、大正十二年から日光が加わった五泊六日が定着しました。

宿泊施設は畳の旅館が当たり前の時代、西洋人向けに作られた中禅寺湖畔の『日光レイクサイドホテル』（現在、リッツカールトン日光）は大きな魅力でした。

『日光は、あの七曲りの坂道を歩いて登りました。宿は

ホテルで、ホテルのサービスやベッドが珍らしゅうございしました。ほんとうに楽しく、結婚してからも何遍も夢に見ました』（同窓会機関誌『桜の実』36号より）

テレビもなく観光バスもない時代、電車を利用して歩いて

回る旅は、見るもの聞くもの新鮮でした。

『三越百貨店』：第一階はほんの一寸見ただけで、自動階段即ちハイカラに云ふとエスカレーターと云うへの緒切つて以来、かつて見たことがないものに乗って二階へ上った。乗って居れば歩かなくても自然に二階へいけるのである。実に人間の怠け根性を満足させるのに最も便利なものである』（『愛知淑徳学園百年史』より）

『江の島』：歩いて行くと「やあ、田舎の女生徒が見てゆくわ、見てゆくわ」と大きな声が聞こえた。こんな悔しい事はなかった。これでも黄金の鯨のくもりなき名も中京の女生徒である。江の島あたりの片田舎者とは違ふぞ』（同右）

『東京』：東京の女生徒は、髪の恰好やリボンの結び方が名古屋と幾らか違っていました。けれども東京の少女はもつともつと華やかで、みんな雑誌の表紙や口絵にあるように美しいのだろうと思っていましたのに、そんな人は一人も見つかりませんでした。やっぱり東京の少女だとて、そんなにきれいなとは思いました』（同右）

*
淑徳生の楽しみであった修学旅行は、戦争と戦後の混乱のため、昭和一八年から昭和二二年までの五年間中断されました。

昭和二三年、ようやく再開された修学旅行は、厳しい食糧事情を反映し、生徒各自が米を持参し京都に一泊するだけのものでしたが、どれほど戦後の解放感と希望に満ち満ちていたことでしょう。

戦後の学制改革により愛知淑徳高等学校は愛知淑徳中学校・愛知淑徳高等学校になったため、これが、淑徳高女生最後の修学旅行となりました。

*
愛知県初の高等女学校である愛知淑徳の修学旅行は、明治、大正、昭和、それぞれの時代の高女生の思いをのせ行われてきましたが、戦争と戦後の混乱期で修学旅行が経験出来なかった淑徳高女生もいます。仕方がないこととはいえ、どれほど残念なことだったでしょう。

修学旅行はいつの時代も生徒の楽しみです。制限されたり、中止になったりすることがないよう、コロナが早く終息することを祈るばかりです。

